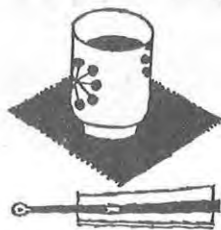


想

随



草芥の墓碑

高野 和人

江戸品川の東海寺は、寛永十五年に徳川家光の台命で沢庵和尚が開創した禪宗の名刹で、『江戸名所図会』によれば、萬松山東海禪寺といひ、五万余坪の広大な景勝絶佳の寺域であったと記されている。当時の肥後藩主細川忠利が沢庵和尚に帰依し、その関係で肥後藩の江戸の墓地が山内の少林院におかれていた。

からすすんで随行し、日本人いや肥後人の文久二年に若くして江戸でなくなり、肥後藩墓地で眠っているはずの、肥後藩士木村鉄太の墓前に、かれの著書『航海記』をささげ、その草芥の霊をなぐさめるためであった。たまたまNHKテレビでも、八日本史探訪Vで鉄太をとりあげ放映したいと電話があったりして、出来るのを待ちかねるようになり、本をたずさえ上京したのを覚えていた。それはまた、三年間にわたって鉄太の人生の軌跡を追いつづけ、やっと刊行までこぎつけた、私のひそかなしめくりでもあった。

服部南郭などの墓がある奥の方、肥後藩の墓地はたしかにあった。だが、そこには整地されたらしい跡に、まるで無縁仏の群れのようにして墓石が累々と積み重ねられていた。文献では、かれの師であった英学者手塚律蔵が哀悼の辞を表したとあるが、刻まれたその墓碑は百年の風雪のなかで、どこかに埋もれてしまったのであろうか。

女の財産

松 永 喜美子

大学時代からの親友Mさんは、美人で氣立てがよく、頭腦明晰と、仲人の褒め言葉そのままの人でした。

終戦後の混乱期に学窓を出た私達は、在学中の夢と希望を切りかえざるを得ない状態になり、大学の実験室に勤務予定だった私は、熊本に帰って苦手な家庭科の教師になり、花嫁修業をしていたMさんは、三井系の会社の研究室に入り、理科系の仕事をやるハメになりました。それから三年。調理技術の拙さを反省した私は再び上京し、一流と言われる方々の門を叩いて基礎から料理の勉強をやり直し始めました。Mさんは化学実験に興味を覚え、これ又初歩から本格的な勉強をするため上京して大学の助手になりました。

私は遅まきながら結婚し、「料理のコツ」の魅力にとりつかれて、小さな料理教室を始めましたが、子供に乳を含ませながら原稿を書き、掃除、洗濯に追われ、泣く子を背負って買物に行くといった足枷・手枷の中での仕事は伸びる筈もなく、心身共に疲れ果てる毎日でした。

私にはむなしい思いで、雑草が繁るにまかせ、訪れる人とならない狭い墓地に残されている、肥後藩士何某といった、それに婦人もまじえた七十一基までを数えあげ、その墓碑銘をたどっていつた。そのうちのひとつにはこう刻まれていた。

——東海寺少林院ノ山ハ吾ガ心ノ安ンズルニ足ル所ナリ——
(図書出版 青潮社)

その頃のMさんは、原子物理の世界で見事に花を咲かせ、「理学博士」になった一との便りを貰いました。理化学研究所に席を置いた彼女は東大の生徒を指導しながら、新しい論文を次々に発表。週末は一流ホテルでストレスを解消し、休暇は海外で——と私達が夢みた成功への階段を着実に登っていました。

先般久しぶりにクラス会に顔を出し、三十年前の思い出話で賑いましたが、無器用で有名だったAさんが、茶・華道の宗家となり、実験をサボってばかりいたKさんは大学教授に、リーダーで活躍していたUさんは、御主人にべったりの良妻に……と自分の能力の中で夫々の生甲斐を見つけ、努力と根性で築き上げたさわやかな顔をしていました。

家庭と仕事の二足の草鞋を履く生活のつらさをばやく私に、独身を通した彼女達は「旦那や子供という財産を持つてくるくせに、何を贅沢な」と叱りました。

「仕事の合間に、やり切れなく淋しくなる時、結婚して自分の家庭を持つた方が幸せだったかもしれないと随分悩んだし、家庭という逃げ場所のある人がうらやましかった。お金で買えない貴女の財産を大事になさいよ。と、しんみりした声で言いました。

成績だけにかかわって、勉強さえすればいい子——といった教育の誤りに、若いお母さん方は気がついて欲しいと思

ます。

与えられた境遇の中で、たえず前向きな姿勢で人生を歩き続けるための健康と、転んでも必ず起き上って飛躍する根性と、相手を思いやる、あたたかい心を、娘の体に仕込むことができたなら、最高の嫁入り仕度だと思えます。

私の母は、指輪や着物、箆笥の代りに、掃除洗濯が苦にならぬ躰と食べるたのしみを、私につけてくれました。現在それがどれ程仕事にプラスしてるかわかりません。「女の財産」とは何か——もう一度考えてみる必要があります。

(料理研究家)

ふるさと

佐野 好古

朝から、ピーヨ、ピーヨとヒヨドリの声がいやに耳につく。

丘陵を切り開いたところに、ちっばけな家を建てて住んでいるせいで、いま流行の八自然色Vにはまことにめぐまれてる。梅雨ごろになると、決まってジャンボ級のムカデが出現するし、女房もこれに対して警戒怠りなく、いつもポットにお湯をさらさないようにしている。

ご存知のように、叩いてもたたいても足を動かしているようなムカデ(足が百もありますから)も、熱にはいたって弱く、ポットを傾けると、煮えて、伸びてしまふ。

いつかは、小生、ステコひとつで寝ていると、右足のスネのあたりがムズムズする。夢うつつで左足でそのムズムズを取っ払い、はっと我に返った。背を起こし、畳の方を直視すると、いた、いた十勢もあるうかという赤く長い奴がずまずまして這っている。ギャッと大声を挙げて跳び上がったところに、ポットを抱えた女房どのの出勤となったわけだが、まあ、よくしたもので、無心にムカデを足で払ったのがよかったのだろう。刺されずにすんだのは、これまた八自然色Vのなせる業であったと思われる。

といったわけで、自然に取り囲まれていると、面白いことに気がつく。やかましいヒヨドリも、雨の日は静かなものである。

「おい、きょうはピーヨが鳴かないぞ」

「雨宿りしてるんでしょ」
のん気な会話を交わすのだが、モノの本によると、このヒヨドリという名称は、やはり、ピーヨ、ピーヨという鳴き声から転化したものだそうだ。それにしても、ヒヨドリというのは、どうも感じがよろしくない。灰色の大き

な体をして楢に留まったりしているのを見るが、いかにも生活力旺盛、なんでもハチコライといった姿が、弱気な小生を圧倒する。木の実、花蜜、果実、それに昆虫まで食べるというし、生物の先生に聞いたら、ピニールで果造りしても平気だという。公害に強い鳥なんだそうだ。そのためか、生態系のなかでもこのヒヨドリは上位にのし上がっているらしい。朝からピーヨ、ピーヨとうるさいわけだ。

休みの日、寺原田畑に降りて歩くと、心がなごむ。あちこちの柿の木には熟れ切った柿の実がたわわだ。そのコハク色には、日本の秋が凝縮されているように思える。

稲の切り株の残った田んぼ、電線に五線譜のように留まっているスズメ。日ごろの忙しさから解放されて、安らかな気分になるのは、これらが故郷の原風景を示しているからだろう。故郷とは、別に自分が生まれた場所でなくてもいい。土と水と緑——わが同胞を産み出した原風景に接すれば、自然と、胎内にもどったような平安さがよみがえるのさだろう。

もっとも、その原風景がいま、開発という名のもとで、荒々しく破壊されつつある。気弱な小生は、小さくなって歩かねばならぬ。

(熊本日日新聞社論説委員)